
東京外国語大学

I C S 9 —

総合文化研究所

2005 年度所員活動報

阿保雅行

〈2004 年度〉

【論文・研究資料】

- ・阿保雅行（2004）本学スポーツ・身体運動基礎科目における実技種目の検討（その2）：学生のニーズの視点から、東京外国語大学論集第67号、pp.131-142.
- ・阿保雅行・藤崎明・鈴木一弘・野崎忠信・斎藤真一・廣田博子・鎌倉光男（2004）競歩審判員制度のモデル構築に関する基礎研究：アンケート調査（2000年と2002年）を中心に」、陸上競技紀要第17巻、財）日本陸上競技連盟、pp.96-103.

【著書・テキスト】

- ・阿保雅行（2005）「混成競技審判長（pp.129-136）、混成競技係（pp.137-141）、テクニカル・インフォメーション・センター（pp.142-144）、上訴審判員（pp.145-148）」、陸上競技審判ハンドブック2005～2006年版、財）日本陸上競技連盟。
- ・阿保雅行（2005）国際競技会の競技運営に対する対応、競技力向上B級コーチ養成講習会・テキスト、pp.22、財）日本陸上競技連盟。

【学会活動・セミナー活動】

- ・運営委員及び講師、財）日本陸上競技連盟主催、「2004JRWJ 育成セミナー」、埼玉県上尾市上尾運動公園陸上競技場、2004年12月10日～12日。
- ・講師、財）日本陸上競技連盟主催、「国際競技会の競技運営に対する対応」、競技力向上B級コーチ養成講習会、2005年1月4日。
- ・講師、「市民スポーツリーダー登録講習会：これからのスポーツリーダーに求められるもの」、府中市教育委員会生涯学習部体育課、2005年3月5日。

【行政関係】

- ・共同（スポーツ振興計画策定協議会委員）（2005）府中市スポーツ振興計画について（報告書）：スポーツタウン府中、府中市教育委員会。

〈2005 年度〉

【論文・研究資料】

- ・阿保雅行・梶原洋子・伊藤宏（2005）長野マラソンの支援システムに関する基礎研究：参加者のニーズに着目して、陸上競技研究紀要第1巻、財）日本陸上競技連盟、pp.23-29.
- ・阿保雅行（2005）本学におけるスポーツ・身体運動基礎科目の満足度と改善度について：2004年度のアンケート調査を中心に、東京外国語大学論集第70号、pp.235-248.
- ・滝沢かほる、ピプサニエミネン、阿保雅行、ヴァイノ・ヴァルスタラ、坂下玲子（2005）教員養成系大学における体育科学学生の指導技能の自己評価：新潟大学と熊本大学を中心に、教育実践総合研究第4号、新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究

紀要、pp.93-98.

- ・ 滝沢かほる・阿保雅行・小林日出至郎 (2005) 感性教育のための体育学習に関するアンケート研究：リズムカル・ムーブメント・プログラムの開発を目的として、新潟大学教育人間科学部紀要第 8 巻第 1 号、pp.97-116.

【テキスト】

- ・ 阿保雅行 (2005) 競技役員に関するルール及び任務、JTO 育成セミナー 2005、(財) 日本陸上競技連盟、p.2-19.
- ・ 阿保雅行 (2005) 混成競技・室内競技に関するルールと運営、JTO 育成セミナー 2005、(財) 日本陸上競技連盟、p.88-105.
- ・ 阿保雅行 (2005) 抗議・上訴の手続きと裁定、JTO 育成セミナー 2005、(財) 日本陸上競技連盟、p.122-139.

【学会活動・セミナー活動】

- ・ 司会 (阿保雅行・原田尚幸)、日本体育学会シンポジウム、スポーツ施設をめぐる経営形態の多様化と地域スポーツ、筑波大学、2005 年 11 月 24 日。
- ・ 運営委員及び講師、(財) 日本陸上競技連盟主催、「JTO 育成セミナー 2005」、東京シティ・エアターミナル、2005 年 12 月 9 日～11 日。

青山亨

【論文】

- ・ 「南海の女王ラトゥ・キドゥル——19 世紀ジャワにおけるイスラームをめぐる文化表象のせめぎ合い——」『総合文化研究』第 8 号、pp. 35-58, 2005 年 3 月 9 日。

【学外活動】

- ・ 「ジョグジャカルタ——インドネシアの古都——」調布市民講座『地球ナビゲーション V』(世界史の中の東西交流～イスラーム圏の都市をめぐる～) 第 6 回、2005 年 6 月 25 日。
- ・ 国際協力機構 (JICA) 専門家派遣前研修講師 (インドネシア国概要)、2005 年 9 月 8 日、10 月 27 日。

荒このみ

【編著書】

- ・ 『史料で読むアメリカ文化史②：独立から南北戦争まで・1770 年代——1850 年代』、東京大学出版会、10 月 21 日。362 頁。概説 1-30。「スレイヴ・パワーからブラック・パワーへ——フレデリック・ダグラス「奴隷にとって七月四日とは何か？」」、69-81。「娘たちはみな「レディ」——フランシス・トロロップ『アメリカ人の風習』」、236-248。「女に

も貯金通帳を——ファニー・ファーン『ルース・ホール』など」、249-263。「ふたたび建設される植民地——アメリカ植民協会年報と『アンクル・トムの小屋』」、274-286。「先住民インディアンの祈り——「夜の詠唱」など」、329-348。

【論文】

- ・「親愛なるマーガレット／もつとも親愛なるワールド」233-274。亀井俊介監修平石貴樹編『アメリカ：文学史・文化史の展望』松柏社、3月10日。総頁519。
- ・「『ルーツ』から「ネーション・オブ・イスラム」へ」18-34。総合文化研究8号、東京外国語大学総合文化研究所、3月9日。総頁197。
- ・「“ニグロ”のイディオム」14-17。ミステリ・マガジン No.591、5月号、早川書房、5月1日。総頁234。
- ・「キング・フィリップ戦争と虜囚記——メアリー・ロウランドスン『虜囚記』」、154-166。『史料で読むアメリカ文化史①：植民地時代・15世紀末-1770年代』遠藤泰生編、東京大学出版会、10月21日。総頁387頁。

【書評等】

- ・米谷ふみ子著『なんもかもわやですわ、アメリカはん』（岩波書店）、「論座」3月号。314-315。朝日新聞社。
- ・スーザン・ソントグ「この人・この3冊」（『反解釈』『土星の徴しの下に』『わたしエトセトラ』）、毎日新聞、3月20日。
- ・ウィリアム・サローヤン「世界の文学」、東京新聞、2005年9月9日（金）夕刊。
- ・リサ・シー『雪花（スノー・フラワー）と秘密の扇子』（Lisa See, *Snow Flower and the Secret Fan*, New York: Random House, 2005）「女書と老同——女の連帯」、I feel（アイ・フィール）No.34、紀伊國屋書店、11月1日。
- ・ラルフ・エリスン著、松本・山崎訳『ラルフ・エリスン短編集』、南雲堂フェニックス、読書人、12月2日。
- ・海外文化「T・モリスン オペラで挑む」、朝日新聞、2005年8月25日（木）夕刊。

【研究発表】

- ・“A Black Boy Coin-Holder: Souvenirs of the South.” Fourth Biennial Conference of the Toni Morrison Society, July 15, 2005. Hilton Cincinnati Netherland Plaza Hotel, Cincinnati, Ohio, USA. (Conference Theme: Toni Morrison & Sites of Memory)

【シンポジウム】

- ・総合シンポジウム「越境的想像力と知の対話の再生に向けて」
報告「グローバル化とアメリカ文学研究」
主催：東京外国語大学21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
「史資料ハブ地域文化研究拠点」グローバル化と多文化的想像力
2005年2月10日（木）東京外国語大学マルチメディアホール
- ・シンポジウム「アメリカ文化における〈黒〉の創発」
報告「作られていく『アメリカの黒人』」

主催：日本アメリカ文学会東京支部 6 月例会（慶応義塾大学）

2005 年 6 月 25 日（司会：佐藤良明・他の報告者：大和田俊之・北野圭介）

【司会】

- ・英文学東京若手の会第 4 回（青山学院大学）

研究発表：加賀谷真澄「『オルノーコ』におけるタバコ——死の一服から読み取れるもの」

2005 年 10 月 1 日（土）

- ・日本アメリカ文学会第 44 回全国大会（北海学園大学・札幌豊平キャンパス）

研究発表：室淳子「現代アメリカ先住民文学と移動」

研究発表：山住勝利「書くこととアメリカ人であること—— John Fante の *The Road to Los Angeles* を読む」

2005 年 10 月 15 日（土）

【ラジオ出演】

- ・ラジオ深夜便・こころの時代

題名：「差別された人々から学んだこと」（2 回）

2005 年 9 月 26 日（月）・27 日（火）4 時 AM（45 分）

藤井守男

今年度は、科研の関係でペルシア語神秘主義テキストの情報蒐集に従事した。西暦 11 世紀半ば頃執筆されたとされるペルシア語最古の神秘主義テキスト『隠された神秘の開示 Kashf al-Mahjub』が、緻密な校訂で定評あるマフムード・アーベディー氏により、ほぼ 80 年ぶりに新たに校訂されたため、同時期のペルシア語テキストとの比較研究を開始した。

また、オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』の数ある邦訳のなかでも、その格調の高さで定評ある竹友藻風訳の『ルバイヤート』が、ロバート・バルフォアの美しい挿絵とともに出版されるに際し、ペルシア文学の側からごく簡単にハイヤームの思想に触れた。イラン国内の最新の研究所を渉猟し、哲学的知性と神秘主義的な言語表現とのかかわりについて再考する機会となった。

『ルバイヤート～中世ペルシアで生まれた四行詩集』オマル・ハイヤーム著、エドワード・フィッツジェラルド 英訳、竹友藻風 邦訳、2005 年 11 月発行、マール社。（「中世ペルシアで生まれた四行詩集」の部分執筆。110～114 頁）

岩崎務

【論文・研究ノート】

- ・「カトゥッルスにおける家郷とローマ」、『「家郷喪失者」の観点による古代ローマ詩比較研究』（科学研究費補助金研究成果報告書）、2005 年 3 月、pp.3-14.
- ・「ローマ詩人たちの家郷と家郷喪失経験」、同報告書、pp.15-30.

亀山郁夫

【著書】

- ・『《悪霊》 神になりたかった男』（みすず書房、6 月）

【論文】

- ・連載「ショスタコーヴィチとスターリン権力」（1 月～12 月、『レコード芸術』）

【エッセー】

- ・「原卓也先生のこと」（『文學界』一月号、文藝春秋）
- ・「こころの風景」（2 月 8・9・10 日、朝日新聞夕刊）
- ・「2004 年文学回顧（ロシア）」（文藝年鑑、新潮社、7 月）
- ・「恐怖と自足の刻印——ショスタコーヴィチの時の時」（『レコード芸術』、8 月号）

【書評】

- ・「荒このみ『アフリカン・アメリカン文学論——「ニグロのイディオム」と想像力』を読む」（総合文化研究 8 号、3 月）
- ・ロイ、ジョレス・メドヴェージェフ『ソルジェニーツインとサハロフ』（大月晶子訳、現代思潮新社、東京新聞、8 月 21 日）

【解説】

- ・米原万里『オリガ・モリソヴナの反語法』（10 月、集英社文庫）

【インタビュー】

- ・イーゴリ・ブラシコフ・インタビュー（『レコード芸術』8 月号）

【メモ】

過渡の一年だったという気がします。「理想の教室」シリーズで出た『悪霊』論は、その「綱渡りの」な話の運びに少なからず批判もありましたが、一般の読者に『悪霊』という小説の魅力を知らせることができたことだけでも、自分なりに満足している仕事です。母と父をめぐる「こころの風景」シリーズに書いたエッセーは、去年、出した『ドストエフスキー 父殺しの文学』の延長上にあるもの、自分でもとても気に入っています。HP にアップしましたので、良かったら、のぞいてみてください。さて、2006 年は、ショスタコーヴィチ生

誕百年の記念すべき年。総合文化研究所の助けなどを得ながら、国際シンポジウムを開きたいと思っています。応援してください。

加藤雄二

5 月に The 16th Annual Conference of American Literature Society の、アメリカ William Faulkner Society のセッションで学会発表をした。フォークナー来日 50 周年だったことと、以前「日本ウィリアム・フォークナー協会」なる団体の全国大会などで行った「学会活動」がまったく学問的なものとは言えず、このままでは申し訳ないという一心でボストンに飛んだ。準備の一貫として、フォークナーの「長野セミナー」の跡を訪ねる調査旅行にもでかけた。力不足もあって不本意な結果に終わったが、とにかくも来日 50 周年の年にフォークナーについて学会発表をすることができた。

夏には Edgar Allan Poe にかんする学会発表計画を立て、Oxford 大学の Rothermere American Institute で来年行われる学会、“Transatlanticism in American Literature: Emerson, Hawthorne, and Poe”に参加するべく発表概要を準備する。90 年代から続いているポーの決定的な読み直しの一貫であるが、基本的な解釈は従来から外大の授業で教えていた内容そのものである。フォークナーがポーの作品を自作において利用するにあたって、従来の学術的解釈とはことなった理解を示していることをヒントにしている。昨年フィラデルフィアの MLA 大会でポー協会のメンバーたちに、こういう解釈を聞いたことがあるかと尋ねてみたが、誰も知らないということだった。発表した解釈がポーの専門家たちにたいして説得力がないとすれば、外大で嘘を教えていたことになるかも知れない。

発表内容は ““Before Christ There Was a Black Christ: Racializing, Sexualizing, and Contextualizing Edgar Allan Poe's ‘The Black Cat’” なる発表概要に纏められて提出され、審査を経て受理された。

川口健一

【エッセイ】

- ・「祭り見物記」『すばる』集英社、2005 年 4 月号、pp.160-161.
- ・「ベトナムの現状」『ベトナムを知ってますか?』(社団法人日本ペンクラブ、第 25 回 WiP(ライターズ・イン・プリズン)の日パンフレット、pp.15-16、2005 年 12 月 2 日開催)

【公開講演会司会】

昨年はベトナム戦争終結 30 年にあたり、本学総合文化研究所企画・主催の「〈ヴェトナム〉を記憶する」(全 3 回シリーズ)が実施され、司会(第 1 回、第 3 回)を務めた。(場所は本学総合文化研究所)

- ・第1回「ヴェトナム戦争とアメリカ、そしてアジア文学」

〔講師：宮内勝典氏（作家）、期日：2005年1月20日〕

- ・第3回「ヴェトナム戦争と文学」

〔講師：関川夏央氏（作家）、加藤栄氏（ヴェトナム文学研究者）、期日：2005年4月21日〕

【市民講座】

- ・「ハノイ：欧化・戦争そしてドイモイ（刷新）の都市へ」、《変貌する現代アジアの都市～文化の諸相と行方～》第6回、2005年12月10日、平成17年度調布市民カレッジ『地球ナビゲーションVI』

菊池陽子

【研究発表・シンポジウム】

- ・「東南アジアの「近代正書法」 ラオスの場合」2005年1月22日 東南アジア史学会関東例会シンポジウム「東南アジアの「近代正書法」」（東京大学）
- ・「ナショナルヒストリーとしての「ラオス史」」2005年11月19日 21世紀COEプログラム関連シンポジウム「ラオスとその周辺における遺産・モノ・生活」（早稲田大学文学部）
- ・「ラオス語正書法をめぐる議論——フランス植民地期を中心に——」2005年12月11日 東南アジア史学会第74回研究大会統一シンポジウム「東南アジアにおける近代言語の形成：権力、権威、正統性」（上智大学）

【公開講座】

- ・平成17年度東京外国語大学公開講座「ラオスへの扉」
第一回「ラオス概観」2005年5月19日、第三回「ラオスの歴史」2005年6月2日（本郷サテライト）

栗田博之

この一年間の研究活動報告

- ・論文：なし
- ・翻訳：なし

科研、共同研究、学会等の研究会に出席し、発表も行ったが、それ以外は大学の点検・評価室での活動に忙殺される毎日であった。研究の現場に復帰するのはまだまだ先の事になりそうである。

李孝徳

【編著】

- ・中野敏男・岩崎稔・李孝徳・大川正彦編『継続する植民地主義 ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社、2005 年。

【論文】

- ・「ディアスポラの名前、歴史、アート」『東京経済大学・学術研究センター年報 2004 年度版』東京経済大学・学術研究センター、2005 年、70-77 頁。

【エッセイ】

- ・「帝国と闘うこと——人間性の回復と道徳性の獲得のために」『季刊 前夜』2 号、76-80 頁。
- ・「〈場〉無き者たちの刻銘 (2) ニコライ・シン『レクイエム、赤い墓、告別のろうそく』」『季刊 前夜』3 号、229-235 頁。
- ・「一丁字を知らず」『季刊 前夜』4 号、2-3 頁。
- ・「〈場〉無き者たちの刻銘 (3) ジェイムズ・ジョイス『ダブリナーズ』」『季刊 前夜』5 号、249-254 頁。

【書評】

- ・酒井直樹・西谷修『増補〈世界史〉の解体：翻訳・主体・歴史』以文社、2004 年（『総合文化研究』8 号、東京外国語大学総合文化研究所、2005 年）。
- ・アンジェラ・デービス『アンジェラ・デービス自伝』加地永都子訳、現代評論社、1977 年（『季刊 前夜』4 号、148-149 頁）。

【劇評】

- ・ハイナー・ミュラー＋ベルリナー・アンサンブル「アルトゥロ・ロイの興隆」（2005 年 6 月 22-30 日、新国立劇場で上演）『季刊 前夜』5 号、41-42 頁。

【研究調査】

- ・科学研究費補助基盤研究 (A) 「変容する戦後東アジアの時空間」（研究分担者）

松浦寿夫

【著書】

- ・『絵画の準備を!』、朝日出版社、2005 年（岡崎乾二郎と共著）

【論文】

- ・「絶対的な匿名性」、『表象としての身体』（叢書『身体と文化』、大修館書店、2005 年）、53-73 頁
- ・「遅延の贈与——意識的構成主義とは何か」、『村山知義とクルト・シュヴィッターズ』、水声社、2005 年、7-19 頁

【短文】

- ・「クールベ」、図書新聞
- ・「その一步手前で——グリーンバーグを読む」、『未来』、7月号
- ・「山田正亮——単一的な複数性」、『芸術新潮』、7月号
- ・「抵抗態を組織すること」、『水声通信』、第3号（村山知義特集）
- ・「a-chroniques」、1-4、『水声通信』1,2,3,4号、2005年

【展覧会】

- ・「岡崎乾二郎・松浦寿夫展」、ガレリア・フィナルテ、名古屋
- ・「FRAME + 松浦寿夫展」、ギャラリー CASO、大阪

【表紙装画】

- ・糸井茂莉、『アルチーナ』、思潮社
- ・西永良成、『激情と神秘』、岩波書店
- ・『學燈』（丸善）、春、夏、秋、冬号

水野善文

【論文】

- ・平成 17 年 3 月 31 日 「『獅子座三十二話』にみるバクティ——利他行として」『中世インドの学際的研究』（科学研究費補助金・基盤研究 (A) (2)、成果報告書、研究代表者：前田専學）pp.252-263.

（概要）13 世紀ごろに成立し愛好された説話集『獅子座三十二話（別名：ヴィクラマ王の所行）』には、王の勇敢な所行が語られているが、その行為は自己犠牲的な奉仕がほとんどで、布施行と見なせるものである。一般民衆が愛好したと思われるこうした説話のなかの描写も、バクティやタントラといった中世インドの宗教的情操環境を色濃く支配した思潮を反映したものであることを検証した。

- ・平成 17 年 12 月 20 日 「ジャータカにみる手紙——古代インド文字文化断章——」『印度学佛教学研究』第 54 巻第 1 号、pp.382-375 < pp.(171)-(178) > .

（概要）巷間に口承され流布していたさまざまな民話を翻案とし、その主人公を現世のブッダと想定することによって須くブッダの前世物語という枠でまとめられたパーリ語の『ジャータカ』（全 547 話）には、作品としての成立より以前の時代の世相も窺えるはずである。そのなか 30 余箇所に見られた書簡にかんする記述を拾い出し検討した結果、王族、商人のみならず、下級武士、婦女子など社会の各層にわたっていることから、予想以上に文字文化が進んでいたことを知った。また、筆記用具の素材についてもヒントを得た。

【翻訳】

- ・平成 17 年 1 月 25 日 ケーシャヴダース著『ラスィク・プリヤー』（H13-15 科学研究

費補助金（基盤研究(C) 2）「インド中世後期の文学理論とりわけラサ論にみる古典サンスクリット文学の伝統」研究代表者：水野善文）研究成果報告書、195p. (various paging)

【事典項目】

- ・平成 17 年 3 月 15 日 「バーラタヴァルシャ」「ラーマ神話」黒田日出男責任編集『歴史学事典 第 12 巻：王と国家』（弘文堂）。

【研究発表等】

- ・平成 17 年 2 月 12 日 ‘第 5 回バクティ研究会’における研究発表「説話にみるバクティの様相」
- ・平成 17 年 7 月 16 日 ‘第 38 回南アジア研究集会（静岡・清水）’の文学セッション『誰が誰に何を語ったか』のコーディネート、司会、および研究発表「中世期の詩人、語り部、語り手」
- ・平成 17 年 7 月 29 日 ‘日本印度学仏教学会第 56 回学術大会（四天王寺国際仏教大学）’における研究発表「ジャータカに見る手紙——古代インドの文字文化——」
- ・平成 17 年 10 月 1 日 ‘日本南アジア学会第 18 回全国大会（京都・龍谷大学）・シンポジウム『通説への挑戦——南アジア研究の課題』’における発表「サンスクリット文学とサバルタン——カーヴィヤ世界は閉じられていたか？」
- ・平成 17 年 10 月 2 日 ‘同上大会における分科会『南アジア研究へ——文学からの問いかけ』’における研究発表「カーヴィヤシャーストラは単なる文学理論書か？」
- ・平成 17 年 11 月 28 日 ‘日本南アジア学会・月例懇話会’小谷汪之著『罪の文化——インド史の底流』（東京大学出版会）論評会におけるコメント。

【シンポジウム、研究会のコーディネート等】

- ・平成 17 年 6 月 20 日 科研「多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として」（研究代表者：水野善文）第 1 回研究会（at 東京外国語大学）コーディネートならびに司会。
- ・平成 17 年 11 月 20 日 シンポジウム「インド古代叙事詩は時間と空間を越える——アニメ映画『ラーマヤナ』をめぐって」（at 東京外国語大学）コーディネートならびに司会。
- ・平成 17 年 12 月 3 日 科研「多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として」（研究代表者：水野善文）第 2 回研究会（at 大阪外国語大学）コーディネート。

村尾誠一

二〇〇五年は、十五世紀の歌人正徹の伝記を書くことを主に仕事が進行了しました。日課のように書くことをめざしていたのですが、なかなか思うように時間が取れないこともあり、結局一年間かけて、何とか目処がつけました。

その間、前年未了だった学部時代の恩師吉岡曠先生への追悼論文集（『平安文学研究 生

成』)のための原稿を仕上げ、秋には編纂作業も終え、年内の出版に至りました。後鳥羽院に関する論ですが、この歌人については、夏に二年前の講演を本に入れる作業をし、また、大学の論集のために「建仁二年の後鳥羽院——歌風形成から中世和歌へ——」という論文を書きました。秋から冬にかけ正徹関係の小論や、本誌所収の「和歌における「故郷」のディアレクティク」を書きました。

今年中に活字になった仕事は以下の通りです。

【論文】

- ・「隠岐の後鳥羽院」(伊東祐子・宇佐見昭徳・神田龍身・福留温子・村尾誠一編『平安文学研究 生成』笠間書院・2005年11月・p.549-568)

【その他】

- ・「古寺巡礼の近代」(和歌文学大系『海やまのあいだ／鹿鳴集』月報・明治書院・2005年3月・p.3-5)
- ・「後鳥羽院と『新古今和歌集』」(JR 東海生涯学習財団編『見果てぬ夢——平安京を生きた巨人たち——』ウェッジ・2005年9月・p.170-200)
- ・「残照の中の王朝的世界——中世和歌史の中から——」(『数研国語通信つれづれ』6号・数研出版・2005年12月・p.6-9)

西永良成

【著書】

- ・『激情と神秘——ルネ・シャールの詩と思想』(岩波書店、2006年1月)

【訳書】

- ・ミラン・クンデラ『カーテン——7部構成の小説論』(集英社、2005年10月)

【評論】

- ・「世界化、実存、小説——クンデラの新作評論について」(《すばる》2005年9月号)

【エッセイ】

- ・「サルトルと私」(《ふらんす》2005年8月号)
- ・「翻訳、対話の愉しみ」(《図書》2005年12月号)

【書評】

- ・B-H・レヴィ『サルトルの世紀』(《日本経済新聞》2005年7月22日)

【シンポジウム】

- ・『世界化の時代における文学の存在理由』(2005年8月6日、日仏会館、第一部司会)

岡田和行

【翻訳】

- ・ロブサンジャビーン・チョローンバートル「モンゴル人の使用してきた文字の研究の諸問題——『僧侶の雑誌』について」『総合文化研究』、第八号、二〇〇五年三月九日、一七六—一八〇頁。

【市民講座】

- ・「ウランバートル：活仏の都から草原の近代都市へ」、平成一七年度調布市民カレッジ（後期開講）『地球ナビゲーション VI 「変貌する現代アジアの都市～文化の諸相と行方～」 第三回』、二〇〇五年一〇月二九日

岡田知子

【教育】

- ・日本国際協力機構 (JICA) カンボジア事務所との JICA-Net プログラムによる学生交流 (6 月 22 日)
- ・王立プノンペン大学国際交流担当教授招聘（本学百周年事業）10 月 22 日～10 月 27 日

【共同研究】

- ・21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点 TUFS 言語モジュール」カンボジア語協力
- ・慶應義塾大学言語文化研究所「東南アジア諸言語研究」クメール語担当

【公開講座】

- ・特定非営利活動法人幼い難民を考える会 第 3 回チャリティ語学講座「はじめてのカンボジア語」「おさらいのカンボジア語」（7 月 1 日～8 月 19 日、全 8 回担当、会場：本郷サテライトキャンパス）

【その他】

- ・「『ヌー・ハーイ文学ジャーナル』の創刊」『東京外大 東南アジア学』第 10 巻、144 頁
- ・「世界の文学 カンボジア 『見直される国産映画』」東京新聞（夕刊）、6 月 17 日掲載
- ・放送大学特別講義「東南アジア文学はいま カンボジア文学 ある女性作家と現代史」7 月 3 日放送
- ・カンボジア王国「ヌー・ハーイ文学賞短編小説部門」審査委員

佐々木あや乃

【論文】

- ・「ハーフェズ詩注解 (2)」『東京外国語大学論集』第 70 号 pp. 131-150. 2005 年 7 月 29 日

【教材（専攻語内資料）】

- ・『ペルシア語基礎講座』2 巻の音声教材 (CD5 枚) 作成 東京外国語大学ペルシア語研究室 2005 年 5 月 16 日

【事典項目】

- ・社団法人日本語教育学会編『新版日本語教育事典』第一章「音声・音韻」J-学習者の音声 より「ペルシャ語」pp. 54-55. 大修館書店 2005 年 10 月 1 日

【その他】

- ・調布市市民カレッジ「地球ナビゲーション V：世界史の中の東西交流～イスラーム圏の都市をめぐる～」全 6 回のうち「テヘラン」2005 年 6 月 11 日担当
- ・渋谷区立恵比寿社会教育館主催世界の歴史講座「イスラームの宗教・暮らし・文化」全 8 回のうち「ペルシア詩の世界」2005 年 9 月 30 日担当
- ・2005 年度『ペルシア語入門』（初級 1／初級 2）全 16 回のうち 2005 年 10 月 18 日、20 日、12 月 1 日、13 日担当（於東京外国語大学府中キャンパス）
- ・文化講演「シャベヤルダー（冬至祭）について」2005 年 12 月 7 日（於イラン・イスラーム共和国大使館）

柴田勝二

○五年は二年ほど前から取りかかった、夏目漱石の研究が中心となりました。帝国主義・植民地主義と漱石の関係は、近年ある程度研究がされるようになりましたが、私の把握ではそれこそが漱石が終生取り組んだ課題であり、人間の自我の問題もむしろ自国の同一性の問題の反映として捉えられると考えています。あと並行して、村上春樹を中心として、消費社会・情報社会における現代文学のあり方への考察も取りかかりました。これも今後数年にわたる課題とするつもりです。○五年に発表した論考などは以下の通りです。

【論文】

- ・「〈光〉と〈闇〉の狭間で——『三四郎』と近親相姦」（『敍説』II-09、〇五・一）七五～九〇頁。
- ・「陰画としての〈西洋〉——『門』と帝国主義」（『東京外国語大学論集』七〇号、〇五・七）一～二〇頁。

- ・「村上春樹と情報社会」(『日本近代文学』第73集、〇五・一〇) 一四二～一五五頁。
- ・「〈日本〉への出発——『林房雄論』と『潮騒』をめぐって」(『三島由紀夫研究』①、二〇〇五・一一) 八九～一〇一頁。

【書評】

- ・テレングト・アイトル『三島文学の原型——始源・根茎隠喩・構造』(『比較文学』第四七号、〇五・三) 一四七～一五一頁。

【学会発表】

- ・「村上春樹と情報社会」(日本近代文学会春季大会シンポジウム「文化史としての現代文学」於・北海学園大学、〇五・五・二九)

【講演】

- ・「夏目漱石と近代日本」(於・寧波大学、〇五・九・二三)

鈴木聡

【論文】

- ・「死と分身——ヴラジーミル・ナボコフの『断頭台への招待』」(『東京外国語大学論集』第七〇号、二七～四八ページ)。
- ・「図形と意識——ヴラジーミル・ナボコフの『キング、クィーンそしてジャック』」(『東京外国語大学論集』第七一号、印刷中)。

武田千香

昨年度10月に開設した多文化コミュニティ教育支援室(平成16年度文科省現代的教育ニーズ取組支援プログラム)の基礎体制づくりを3月までに行い、4月から運営委員一丸となって、ようやく同支援室の本格的な活動を開始した。新学期には活動する学生ボランティアを全学的に公募、また、学習支援のほかに小・中学校での国際理解教育への参加が新たに学生のボランティア活動に加わり、9月にはこうした活動に必要な知識や技能を身につけるための教育研修プログラムを開催、さらに、各地で作成されている外国人児童生徒向けの教材を収集する調査研究活動も全国的に展開した。その合間には講演会や調布市民講座の開講、地域の外国人向けの日本語教室など、多文化共生社会の実現を目指すためのさまざまな行事を行なった。これらは私個人の活動ではなく、他の6名の運営委員(伊東、青山、河路、船田、森朴、長田)と専従スタッフ(松井)とともに推進してきた同支援室の活動である(敬称略)。

この1年は激動ならぬ「激闘」の1年で、現代GPの活動が軌道にようやく乗ろうかというその矢先の5月末のこと、急遽、外国語学部の来年度の概算要求に「多言語・多文化教

育プロジェクト」を申請することになり、僅か10日ほどでプロジェクトを練り上げ、6月半ばに提出。12月末には採択が決まった。

こうした中、とうとう自分の専門分野ではなく、多文化共生に関する発表を行なうことになったのも、これまでにはない経験であった。

このようなまさに“激闘の”“多文化な”1年を過ごす中、普段の授業のほかには、日本語の論文1本とポルトガル語の論文1本、そして、ブラジルの現代小説の翻訳を1つ仕上げるのがやっとであった（このうち論文1本と翻訳は来年以降の発表となる）。

今年発表した出版物や原稿は次のとおりである。

【論文】

- ・2005年7月「近代国家ブラジルに捧げられた反・建国神話——『エサウとヤコブ』の寓意性についての一考察——」（東京外国語大学論集70号）

【辞書】

- ・『現代ポルトガル語辞典』、共編（他4名）、白水社、1463頁（p. 1～p. 303を担当）、2005年12月、

【発表】

- ・「平成16年度 国際交流団体セミナー ケース・スタディ3～教育～教育機関の取り組み」（平成16年度 国際交流団体職員セミナー～今、改めて国際交流団体のこれからを考える～）、70分、2005年3月3日
- ・多文化共生フォーラム「多言語・多文化社会の求める人材育成をめざして」（国立民族博物館、多文化共生センター共催）、2005年10月9日

このほか、科学研究費補助金（（基盤研究(C)(2)）「マシャード・デ・アシスと夏目漱石～対蹠地の同時代作家の近代化に対する共通意識～」を継続中で、8月～9月には、資料収集と調査のため、パラグアイとブラジルへ出張した。

谷川道子

二〇〇五年度は「日本におけるドイツ年」ということで、演劇の分野も盛りだくさんのプログラムでした。今が旬（しゅん）の舞台がドイツから怒涛のごとくやってきたし、あるいはドイツの演出家が自作あるいは鶴屋南北の『四ツ谷怪談』や三島由紀夫の『近代能楽集』を日本の俳優で演出したり、日本の劇団も負けじと「ドイツ物」の演目や催しでそれに連動したり、等々。のみならず、ドイツ文化センターの後援で、現代を映し出す戯曲を一挙に三十作品、論創社より『ドイツ現代戯曲選30』シリーズとして順次翻訳・刊行しようということとなっていて、これもかつてない企て。ならば戦後生まれの世代がチームを組んで翻訳にあたるだけでなく、ドイツ演劇を広く知って貰えるまたとない好機にしないでと、「ドイ

「ドイツ演劇の面白さを伝えたい！」という謳い文句を入れた宣伝パンフを作ったり、さまざまなシンポジウムやドラマ・リーディング、シアター・トークなども企画、そのためにドイツ演劇研究会を母体として「ドイツ演劇プロジェクト 2005」なるものも立ち上げ…… 結果として今年もフル回転のスケジュールとなりました。

今回も備忘録的にそういう演劇実践現場と関わっての活動から。

【まずはシンポジウムなど】

- ・皮切りが、2月の両国シアター X での『ドイツ現代戯曲選 30』編集委員 5 名そろい踏みによるシンポジウム「ブレヒト以後のドイツ現代演劇」。
- ・4月シアター X での公演 P. トゥリーニ作『ねずみ狩り』のアフタートークで演出家ペーター・ゲスナーと対談。
- ・6月世田谷パブリック・シアターでのドラマ・リーディング・シリーズでの公演 P. ハントケ作『私たちが互いを知らなかった頃』のアフタートークで演出家山本清多と対談。
- ・7月の俳優座劇場での舞台美術家協会ギルド・俳優座共催のドイツ年記念演劇フォーラム「ドイツ演劇——昨日・今日・明日～シラーからブレヒトへ……」。
- ・10月の日本独文学会京都秋季研究発表会で、新国立劇場監督の栗山民也を迎えてのシンポジウム「演劇のパラダイム転換と新しいタイプの戯曲テキスト」。
- ・10月の金沢市民芸術村でのレーマンを迎えての国際シンポジウム「ハイナー・ミュラー効果と演劇創造都市」。
- ・11月の新国立劇場での公演『母・肝っ玉』のアフタートークにて演出家栗山民也や主演大竹しのぶ等の出演者と対談。
- ・12月ドイツから Dr. ヘルター氏を迎えての総合文化研究所主催水曜文化講座でのコロキウム「文化政策を考える——ドイツの芸術家会館ベターニエンを参考に」の司会・企画。

【翻訳関連では】

- ・11月15～20日の兵庫芸術文化センターと11月28日～12月12日の新国立劇場の双方で公演された『母・肝っ玉とその子供たち』の翻訳を担当。稽古にも付き合いながらの台本作りで、けっこう大変ながら面白い経験！
- ・『ドイツ現代戯曲選 30』シリーズはいろいろ難産の末にやっと12月に3冊が刊行。私が担当したイエリネクの2冊とハイナー・ミュラーの『指令』は2006年中に刊行の予定。

【著書としては】

- ・この『ドイツ現代戯曲選 30』シリーズへの道案内という意味も込めて、論創社より12月にこれまでの論考をまとめて再構成した『ドイツ現代演劇の構図』を刊行。
- ・共著としては、3月にぺりかん社より、早稲田大学での演劇 COE 講座の「演劇論講座」をもとに、岡室美奈子編で内野儀、宇野邦一、大橋洋一、桑野隆、谷川道子共著の『知の劇場、演劇の知』も刊行。私の論考は「ドイツ演劇の現在——ポストドラマ演劇とハイナー・ミュラーの位相」(21～73頁)で、本来なら前掲の『ドイツ現代演劇の構図』の後を受けての論考の予定だったが、順序が転倒してこちらが先に出版。

【上記以外に活字になったものとしては】

- ・『母・肝っ玉とその子供たち』の上演パンフの兵庫版に「『母・肝っ玉とその子供たち——三十年戦争年代記』翻訳に寄せて」(2～3頁)、新国立劇場版に「戦争は商売、商売は戦争——肝っ玉とは誰？」(24～25頁)をそれぞれ寄稿。
- ・劇評：「日本におけるドイツ演劇」の未来形二つ——『ねずみ狩り』と『ホラティ人』——雑誌「Deli [デリ]」第5号、166～168頁に寄稿、沖積社、2005年11月。
- ・東京新聞への寄稿記事：「ドイツ戯曲選30」の刊行に寄せて、3月19日朝刊号。
- ・書評：柴田勝二著『〈作者〉をめぐる冒険』(新曜社、2004年)、「総合文化研究」第8号、167～170頁所収、東京外国語大学総合文化研究所発行、2005年3月。

【東京外国語大学におけるドイツ年】

また秋には、日本におけるドイツ語とその文化の教育・研究に携わる本学としてやらざるまいの気概で「東京外国語大学におけるドイツ年」も企画。学生のみならず事務方や同窓会など諸方面にご協力頂いたので、お騒がせしましたが感謝も込めて再度紹介。これらは本学ドイツ語専攻同窓会機関誌・ゲルマニア会編集発行「ゲルマニア」第7～8号でも記事となる予定。

- ・10月2～12日に本学1階ガレリアでゲーテ・インスティトゥートの企画のマルチ・メディアを駆使しての、「Herzliche Grüße / ドイツ語発見」展。
- ・11月9日に学生や市民聴講生の参加も得ての総合文化研究所のピアノを有効利用するDeutscher Lieder-Abend「日本におけるドイツ年」記念コンサート：語りとピアノと歌で綴る「ドイツリートの日」も、モーツァルトからシューベルト、シューマン、シュトラウスまでのドイツリートを並べて好評開催。
- ・11月23日には外語祭の最後を締めくくってのDeutschsprachiges Theater bei dem Unifest Gaigosai: “Wilhelm Tell” ドイツ語劇『ウィリアム・テル』上演。2005年はシラー没後200年で『ウィリアム・テル／瑞西独立自由弦』日本初演100年、それに果敢に2年生が挑戦し、これも大奮闘でした。
- ・最後が既に言及した12月8日の総合文化研究所主催水曜文化講座でのコロキウム「文化政策を考える——ドイツの芸術家会館ベターニエンを参考に」。

【本学関連の付記として】

- ・語劇GP「生きた言語習得のための26言語・語劇支援」が昨12月に開催した静岡県大東町での「日本・ブラジルの集い」の報告書を委員の黒澤直俊先生と協力して完成させ、掛川市との合併ですでに消滅した大東町に贈呈。また今年の外語祭語劇も舞台や照明など施設や設備、ワークショップの充実を得て一層向上し、観客数も数倍増、好評でした。
- ・また三年越しの調布市市民カレッジも、第6回の川口健一先生企画による「地球ナビゲーションVI:変貌する現代アジアの都市」を昨秋に小林二男・三枝壽勝・岡田和行・内藤耕・宇戸清治・川口健一の六人の先生方で好評理に開催、これで無事に終了しました。ご報告とともにあらためて本総合文化講座の先生方のご協力に心より感謝します。

以上はともあれ二〇〇五年の想定内の計画・企画だったのですが、想定外だったのが秋からの総合文化講座長に選ばれてしまったこと。文字通り青天の霹靂で、やり切れるかなと案じつつ、皆様のご支援のおかげで何とか年を越せました。感謝!?

土佐桂子

【共著】

- ・ The Chicken and the Scorpion: Rumor, counternarratives, and the Political Uses of Buddhism. In *Burma at the Turn of the 21st Century*. edited by Skidmore, Monique. Honolulu, University of Hawai'i Press. pp.154-73.

【論文】

- ・ 「ビルマにおける高僧信仰の現在——巡礼地形成における社会的ダイナミズム」『社会人類学年報』31 巻：31-60.

【発表】

- ・ 「The gender policy and changing family in Myanmar」 "Toward a New Model of East Asian Society: Entrepreneurship and the Family" (JSPS-NRCT Core University Program) 『変貌する家族』プロジェクト会議発表（京都大学、2005 年 10 月 15 日）

【社会活動】

- ・ 「経済変化と宗教の「再生」」 アジア理解講座「現代ミャンマーを知ろう」（国際交流基金、2005 年 6 月 16 日）

宇戸清治

【論文】

- ・ 「現代タイ小説に見る表現技法 (2) ——レーゼ・シナリオとしての『ロム・ロン』」（『東京外大東南アジア学』第 10 巻、東京外国語大学東南アジア課程研究室、2005 年 3 月、pp.1 ~ 19）

【研究発表】

- ・ 「チャトリーチャローム・ユコン監督作品における社会問題の表象」（タイ語）2005 年 12 月 23 日、Thai Film Foundation（タイ国立フィルム財団、ナコンパトム）

【研究調査】

- ・ 科学研究費補助金基礎研究 (C) 「1980 年代のタイ映画に表象された大衆文化の変容の研究」（研究代表者）平成 16 ~ 17 年度。本年度はベトナムとタイの映画を取り巻く状況について調査、資料収集、研究を実施した。

【講演】

- ・「バンコク：発展するメガロ・シティー」平成 17 年度調布市民カレッジ『地球ナビゲーション VI』2005 年 11 月 26 日。

【その他】

- ・「海外の文学タイ：プラープダー・ユン」毎日新聞 2005 年 4 月 8 日（夕刊）
- ・「東南アジア文学はいま：タイ文学～新世代の作家たち～」放送大学特別講義、2005 年 10 月 15 日
- ・独立行政法人 JICA 青年海外協力隊語学訪問委員青年海外協力隊語学訪問委員としてタイ語教材作成に協力（4～12 月）

山口裕之

今年度はかたちとなって現れる研究面での活動が乏しい年でした…

【学会発表】

- ・「クラウド研究についてのベンヤミン『カール・クラウド』」
二〇〇五年五月四日（水） 日本独文学会・二〇〇五年春季研究発表会、シンポジウム VI「カール・クラウド 仕事とその影響の諸相」Karl Kraus. Aspekte des Werks und seiner Wirkung（早稲田大学文学部）

柳原孝敦

活字化されたものは、この一年、なかった。二本ほど、メキシコとベネズエラの雑誌に掲載されることになっている原稿を書いたには書いたのだが、雑誌のできあがりが遅れている模様。

口頭での発表は、研究発表と言うよりは一般向けの講演の形式のものを二つほど行った。五月には函館で、ルイス・ブニエールについての話を。十二月には立教大学ラテンアメリカ研究所主催の後援会「現代のラテンアメリカ」において、「環大西洋文化ネットワークの形成」という話をした。

本学総合文化研究所との兼ね合いで言えば、なんと言っても、「水曜文化講座」の一貫として、「もうひとつの声——メキシコ現代詩を読む」という催しを開いた。『現代メキシコ詩集』（土曜美術社）というアンソロジーに収録された三人の詩人、アウレリオ・アシアイン、アントニオ・デルトロ、ルイヒ・アマーラ（詩集での表記はこうだが、本人に確認したところ、名はルイジという発音が好ましいとのこと）をお呼びして、自作を語り、朗読してもらった。多くの方が詰めかけ、盛況であった。

吉本秀之

2005 年度の活動として特筆すべきは、なんといっても、3 月 10 日から 12 日にかけてフランス南部の都市ボルドーで開催された国際コロック「ロバート・ボイルの自然哲学」に参加して発表したことです。研究は、リエージュ在住の平井浩博士との共同研究でした。この共同研究というのも私の研究履歴においてはじめてのことでしたが、国際コロックに招聘されて発表するというのも生まれてはじめての体験でした。

非常に多くのことがわかりました。得られたものも非常に大きい。この点に関しては独立したエッセイを書く機会があらうかと考えています。

その発表成果が共同研究者の平井浩博士の集中的な尽力があって、年末に次の形で出版されました。

【共著】

- ・Hiro HIRAI and Hideyuki YOSHIMOTO, “Anatomizing the Sceptical Chymist: Robert Boyle and the Secret of His Early Sources on the Growth of Metals” , *Early Science and Medicine*, Volume 10, Number 4 ,2005, pp.453-477. (<http://www.ingentaconnect.com/content/brill/esm/2005/00000010/00000004/art00001>)

他の出版物は次の通りです。

【書評】

- ・「金子務『オルデンバーグ——17 世紀科学・情報革命の演出者』（中央公論新社、2005）」『科学』第 75 巻第 11 号（2005），pp.1331-1332.

【エッセイ】

- ・「弱視の貴族科学者ロバート・ボイル」『サイエンスネット（数研出版）』第 24 号（2005 年 9 月），pp.6-9. (http://www.suken.co.jp/subject/rika/sc_net/24/sc24_2.pdf)

【事典項目翻訳】

- ・『科学大博物館——装置・器具の歴史事典——』朝倉書店、2005 年「光量計」と「ビュレット」の 2 項目を翻訳

【学会発表】

- ・「ロバート・ボイルとその化学教師」『化学史研究』第 32 巻（2005）第 2 号、p.116.（2005 年 6 月 19 日、神戸大学国際文化学部）
- ・「ロバート・ボイルの読書」『日本科学史学会 52 回年会 研究発表講演要旨集』p.53.（2005 年 6 月 4 日～5 日 北海道開拓記念館／札幌学院大学）

【ブックレット（編集兼発行）】

- ・『総合文化研究ブックレット第 5 号：東京外国語大学における教養教育の検討の事例』（東京外国語大学総合文化研究所、2005 年 3 月）51 頁。